

おもいでタンカー



おはなし・え：まっちゃん

ニコニコ村 の動く絵本 



おじいさんをのせた
みどり色の 大きな、大きなタンカーが
星の中を すすんでいます。

みどり色は おじいさんが いちばんすきな色で、
どんなに遠くから見ても、
ひとめでおじいさんのタンカーだとわかります。



タンカーの上には、
小さな小さな小屋がありました。

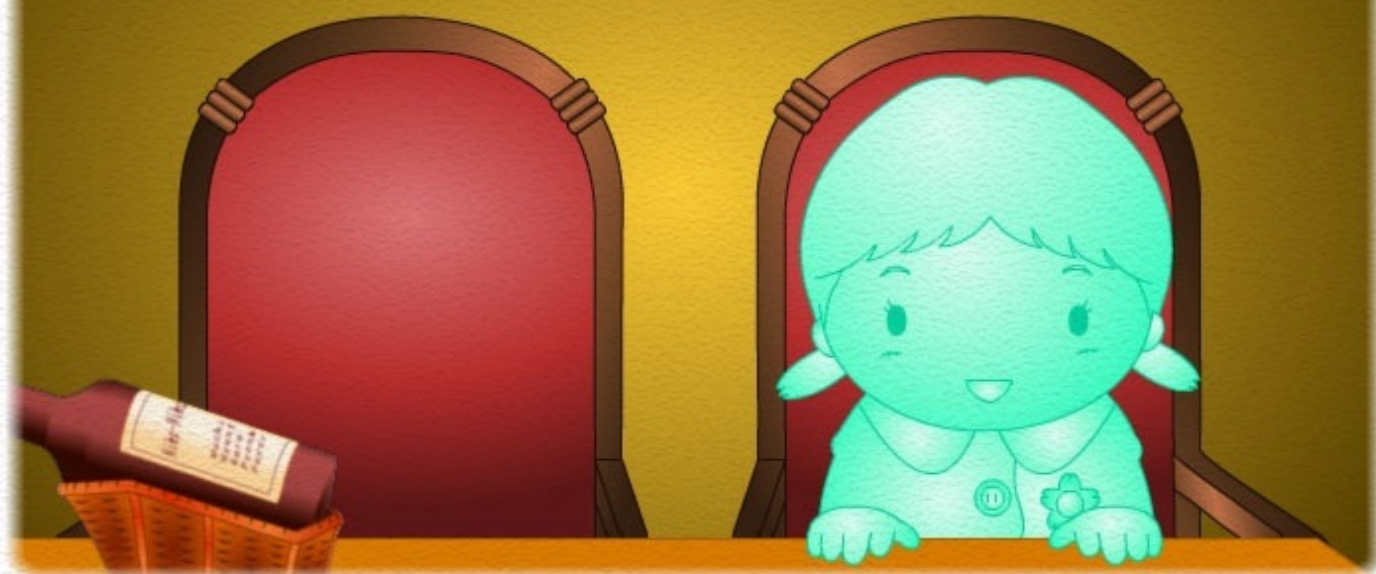
おじいさんは その小屋に ひとりですんでいます。



おじいさんは まどの外を ^{そと}ながめながら、
^{すこ}少し ねむくなってウトウトしていました。

すると、だれかが おじいさんの ^{なまえ}名前を
よんでいるような ^き気がしました。

「ゆうちゃん、ゆうちゃん！」



おじいさんが ^め目をあけると、
^む向かいの ^{おんな}せきに ^こ女の子が すわっていました。

「やあ、みーちゃん、ひさしぶりだねえ」



まいにち
「毎日、いっしょにあそんだね。」

みーちゃんが、
ぼくの はじめての ともだち 友達だったよ。」



「とお とお だけど、どこか遠い、遠いところに
ひ 引っこし しちゃったね。
げんき 元気にしてたかい？」

おじいさんは たの 楽しかったことと、
さびしかったことを おも だ 思い出して、
なみだを ながしました。



おじいさんが ^め目をあけると、
そこには ^{おんな}女の人 ^{ひと}が ^{わら}ニッコリ笑って
おじいさんを ^み見ていました。

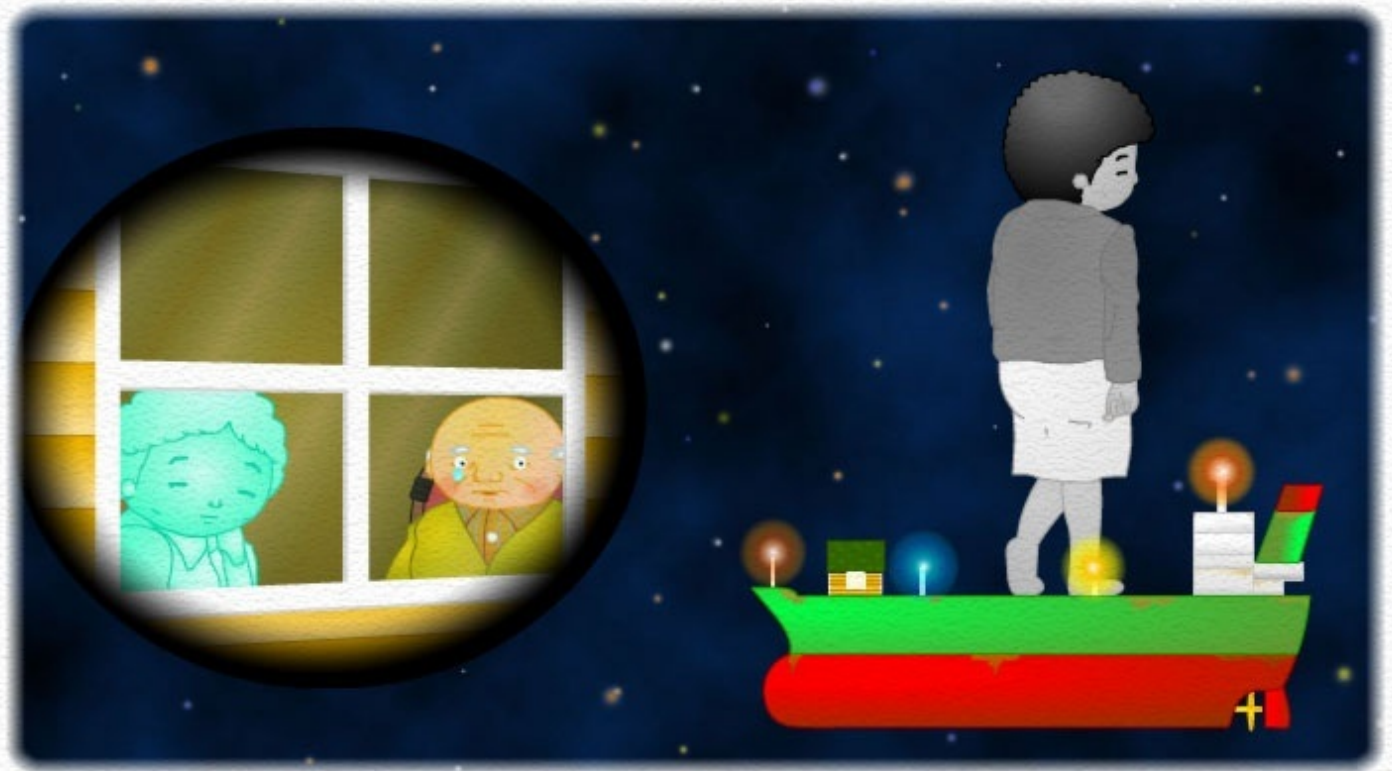
「^{かあ}お母さん！ ^{かあ}お母さん！」



「ぼくが ^{ちい}小さいころ、
^{かあ}お母さんは
^{まい}毎ばん ^{えほん}絵本を ^よ読んでくれたね。

^{かあ}お母さんが ^{つく}作ってくれた ^{おべんとう}おべんとうは、
^{ほんとう}本当に おいしかったなー。

ぼくが ^だねつを ^だ出したときは、
^{しんぱい}心配そうな ^{かお}顔をして ^{びょう}かん病してくれただけ。」



「でも ぼくが大人になる前に、
お母さんは天国に行ってしまったね。

お母さんには、
全然 親孝行を してあげられなかった。

ごめん、ほんとうにごめんね。」

おじいさんは 楽しかったことと、
つらかったことを 思い出して、
なみだを ながしました。



おじいさんが なみだをふいて 目をあけると、
そこには 1匹の犬が ニッコリ笑って
おじいさんを 見ていました。

「タロー！タロー！」



「タローとは
いつも いつも いっしょにいたね！

いたずら^てずきで、
お手も できない 犬^{いぬ}だったけど、
ぼくは きみのことが 大^{だい}すきだったよ。

ぼくが 学校^{がっこう}から帰^{かえ}ったら、
いつも ちぎれそうになるくらい しっぽをふって、
ぼくを おむかえしてくれたね。」



「きみが ^{びょうき} 病気に なってしまったとき、
ぼくは なにも してあげることができなかった。

もっと もっと
いっしょに あそんでいたかったのに、
ごめん、^{ほんとう} 本当にごめんね。」

おじいさんは ^{たの} 楽しかったことと、
^{かな} 悲しかったことを ^{おも} ^だ 思い出して、
なみだを ながしました。



おじいさんが なみだをふいて 目をあけると、
そこには ふたりの しょうねん 少年が ニッコリ わら 笑って
おじいさんを み 見ていました。

「やあ、ふたりとも。 き 来てくれたのかい？」



「いつも 3にん いっしょだったな。
毎日 まいにち れんしゅうで クタクタになっても、
れんしゅうのあと後は みちより道したな一。

おとな大人になっても ときどき時々 あ会って、
よる夜おそくまで かたりあったっけ。」



「だけど、ぼくたちは
どうしても3回戦^{かいせん}で勝^かてなかった。

3人^{にん}で 部室^{ぶしつ}で泣^ないたっけ・・・」

おじいさんは 楽し^{たの}かったことと、
くやし^{おも}かったことを 思い出^だして、
なみだを ながしました。



おじいさんが なみだをふいて 目をあけると、
そこには ひとりの ろうばが ニッコリ笑って
おじいさんを 見ていました。

「やあ、母さん。」



「きみの ^{つく}作ってくれたオムレツは、
さいこうに おいしかったよ。

きみが ^{いえ}家のことを ^{しつかり}しっかり してくれたから、
ぼくは ^{あんしん}安心して ^{しごと}仕事をする ことができたんだ。

ぼくの ^{しごと}仕事が ^{たいへん}大変だったときも、
きみは ^{たす}ずっと ぼくを 助けてくれたね。」



「きみは いつも ぼくを ^{ささ}支えてくれていたのに、
まだ、ちゃんと おれいも ^い言ってなかったね。

てれくさくて ^い言えなかったんだよ。

ごめんね。

^{ほんとう}本当はとても、とても ^{かんしゃ}かんしゃしているよ。」

おじいさんは ^{うれ}うれしかったことと、
やるせない ^{おも}思いで、
なみだを ^{なが}ながしました。



おじいさんが なみだをふいて 目をあけると、
そこには ひとりの おとこ 男の人が ひと ニッコリ め 笑って わら
おじいさんを み 見ていました。

「やあ、だいき。」



「きみが ^う生まれてきてくれたときは、
^{ほんとう}本当にうれしかった。

きみを ^{てん}だきあげたときは
天にも ^{きも}ものぼる 気持ちだったよ。

^{おとな}大人になって、はじめてもらった ^{きゅうりょう}給料で、
ぼくと ^{かあ}母さんに ごちそうしてくれたね。

あんなに おいしいごちそうは
はじめてだったよ。」



「だいきが こうつうじこ 交通事故で にゆういん 入院 したときは、
ぼくは
君の手をにぎって^ていてやることしかできなかつた。

だいきの い 意しきが もどつたとき、
ぼくは どれほど
神さまに かみ かんしゃしたかわからない。」

おじいさんは うれ うれしかったことと、
しんぱい 心配したことを おも だ 思い出して、
なみだを なが ながしました。



おじいさんが なみだをふいて 目をあけると、
そこには ひとりの ろうじん 老人が ニッコリ わら 笑って
おじいさんを み 見ていました。

「お父さん！お父さん！」



「ぼくが ^こ子どものころ、
お父さんは ^{とう}仕事で ^{しごと}いそがしくても、
いろんなところに
あそびに ^いつれて行ってくれたね。

お父さんの ^{とう}スーツすがたも
ぼくは ^{だい}大すぎだったよ。

お母さんが ^{かあ}天国に ^{てんごく}行った ^い後も、
お父さんは ^{とう}ひとりで ^{あと}ぼくをそだててくれたね。」

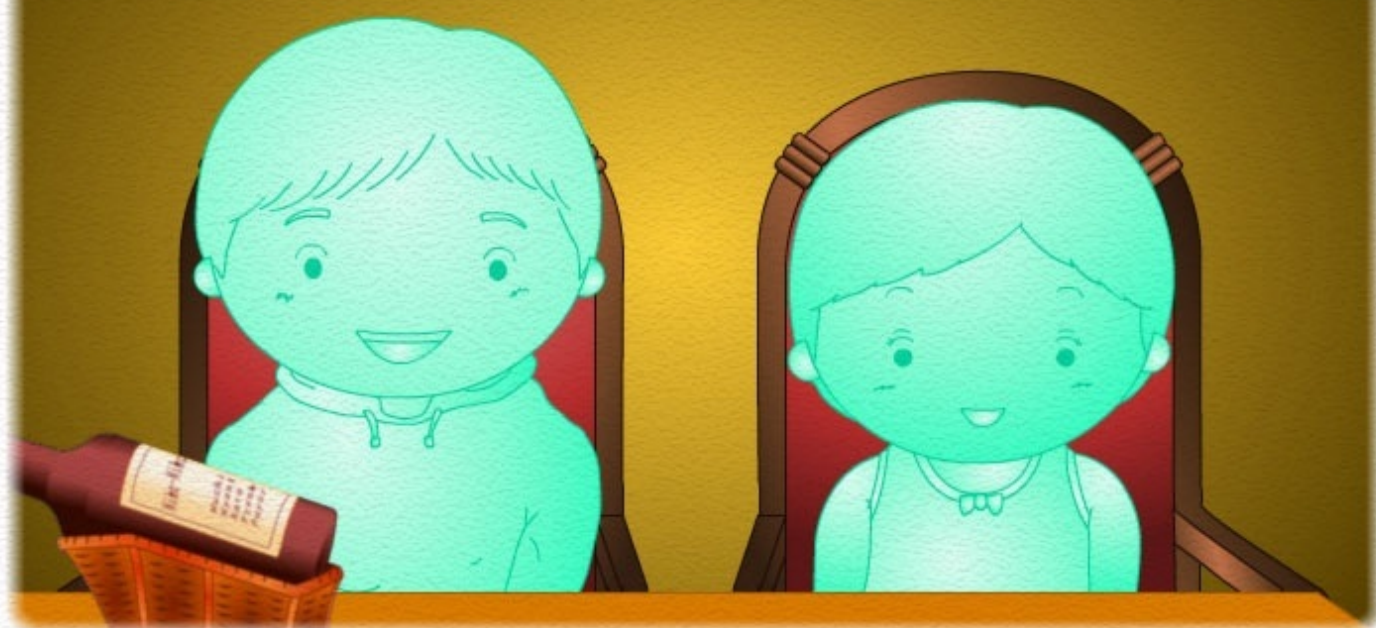


「ぼくは お母^{かあ}さんの 分^{ぶん}も、
お父^{とう}さんに 親^{おや}こうこう できたかい？

ぼくが ここに こうしてられるのも、
お父^{とう}さんの おかげだよ。

ありがとう、 本^{ほん}当^{とう}に ありがとう。」

おじいさんは うれしかったことと、
かんしゃの気^き持^もちを 思^{おも}いだして、
なみだを ながしました。



おじいさんが なみだをふいて 目をあけると、
そこには
小さな ちい 男の子と おとこ 女の子が おんな ニッコリ笑って こ
おじいさんを み 見ていました。

「やあ、おちびちゃんたち、
あ 会いにきてくれたのかい？」



「きみたちは
きみたちが
ほんとう本当に やりたいと おも思ったことをやりなさい。

だけど、
とうお父さんと かあお母さんが かな悲しむような ことだけは、
ぜったいにしちやいけないよ。」



「やあ、みんな！」

たの
かな
楽しいことも、うれしいことも、
悲しいことも、つらいことも、

いっぱい、いっぱい、あったけど、
みんなのおかげで・・・」



「ぼくの じんせい 人生は さいこうに おもしろかったよ！

ありがとう！

ありがとう！みんな！」



おじいさんの たくさんの おもいでを
のせた タンカーは
きょう ほし なか
今日も 星の中を すすんでいきます。



The End



ニコニコ村 の動く絵本

<http://www.nikonikoehon.net/>

震災で 大切な人を亡くした人へ

「おもいでタンカー」の前半は、
僕の実話をもとに作ったお話です。

僕のお母さんは、僕が中学を卒業する1週間前に天国に行きました。
お母さんは45歳でした。

僕が45歳になるには、もう少し時間がかかります。
でも、だんだん母親の年齢に近づくとつれ、
45歳というのは、なんと若い年齢だったのだらうと思うのです。

僕は人生の目標を持っていますが、
それとは別に 0（ゼロ）目標というものがあります。

絶対に45歳まで生きるという目標です。

簡単じゃないかと思う人もいるかもしれませんが、
震災で大切な人を亡くした方には、
それが決して簡単な目標ではないことがわかんと思います。

どうか、亡くなった大切な人の分まで「楽しみ」、「喜び」、「悲しみ」を味わって生きてください。

人生は楽しいことも、苦しいことも悲しいことも、たくさんあるけれど、
きっと それを全部含めて 楽しいものなのだと思います。

まっちゃん

[おもいでタンカー（動く絵本バージョン）](#)

[おもいでタンカー（読み聞かせバージョン）](#)